

## 神奈川県天然記念物指定10周年記念 アオバト特集号



### もくじ

|                                             |    |
|---------------------------------------------|----|
| ◇企画展『アオバトのふしぎ～神奈川県天然記念物指定<br>10周年記念～』をふりかえり | 2  |
| ◇2006年のストランディング情報                           | 6  |
| ◇文化財特別公開『旧高麗寺の神と仏<br>－神仏混淆（しんぶつこんこう）を体感する－』 | 7  |
| ◇『城山荘（三井大磯別邸）軸組模型と久米権久郎』                    | 9  |
| ◇常設展示室小コーナー展示替／資料の受入／行事のご案内                 | 10 |

## 企画展『アオバトのふしぎ ～神奈川県天然記念物指定10周年記念～』をふりかえり

### はじめに

大磯町郷土資料館では、平成18年5月28日（日）から7月30日（日）まで、企画展『アオバトのふしぎ～神奈川県天然記念物指定10周年記念～』を開催しました。この展示は、サブタイトルにもあるとおり、大磯町照ヶ崎の岩礁がアオバト集団飛来地として、1996年2月に県の天然記念物に指定されてから10年の節目を迎えたことを契機に企画したものです。照ヶ崎、アオバトに関連する展示は平成8年度に企画展『アオバトと照ヶ崎（会期：平成8年5月26日～6月9日）』として開催しています。前回の企画展では、県天然記念物に指定されたことに触れ、指定理由であるアオバトの集団飛来、海水吸飲を広く紹介するため、全紙・倍紙大の写真パネルで照ヶ崎での状況を紹介しました。今回の企画展では、更に掘下げた内容とするため、長年にわたりアオバトの調査を行なっている『こまたん（湘南地方を基点に野鳥観察を中心とした自然観察会を実施している団体）』と共催事業として実施しました。

### 『こまたん』のアオバト調査活動

『こまたん』が照ヶ崎岩礁の保護活動を開始したのは、港の拡張、ヨットハーバーの新設の計画が上がったことに起因します。アオバトにとって、照ヶ崎は相模湾の長い海岸線の中で、繁殖地とされる丹沢山地に近い唯一の岩礁であるため、生活上、重要な場所と考えられています。この地の保護のため、こまたん有志による「アオバト探検隊」が結成され、1991年4月から12月まで綿密な調査が行なわれました。また、同時に丹沢からの飛行経路についても探索し、これらの調査結果は報告書「大磯町照ヶ崎海岸におけるアオバトの生態」にまとめられました。この報告書では、照ヶ崎が5月から10月までの間、アオバトの安定した飛来地であること、1日ののべ飛来数が2000羽を超える日があり、非常に多数の個体が飛来していること、丹沢山地から確かに飛来してくることなどが示されました。港の拡張、ヨットハーバーの新設はその後、白紙となり、現在に至っていますが、神奈川県天然記念物指定は、5年の歳月をかけた調査及び保護活動により実現したものです。

『こまたん』は指定後も引き続きアオバトの習性解明のための調査を行ない、表1に記載のレポートや報告書を発表しています。

### 『こまたん』が発表した アオバト関連のレポート・報告書

- こまたん, 1992. 大磯町照ヶ崎海岸におけるアオバトの生態. 日本野鳥の会神奈川支部, 96pp.
- こまたん, 1996. アオバトの糞から検出された植物種子. BINOS, (3): 1-8.
- こまたん, 2003. 丹沢山地堂平におけるアオバトの繁殖調査. BINOS, (10): 1-17.
- こまたん, 2003. 大磯町西部虫窪地区における冬季のアオバトの観察記録. BINOS, (10): 99-108.
- こまたん, 2004. 大磯町照ヶ崎海岸におけるアオバトの幼鳥観察. BINOS, (11): 1-16.
- こまたん, 2005. 京都御苑のアオバトー2004年秋～2005年春ー. BINOS, (12): 7-35.

表 1

### 企画展『アオバトのふしぎ』の展示概要

本展は『こまたん』のアオバトに関連する調査の成果をもとに、前期と後期の2期に分けて実施しました。会期中中に展示替えを行ないましたが、企画展示室全体の展示内容の変更という訳ではなく、変更した箇所は企画展示室全体の凡そ半分のスペースで、残りの半分のスペースは前期・後期の通して同じ内容で行ないました。



前期展示の展示風景

前期展示はサブタイトルを「なぜ海水を飲むのか?（会期：5月28日～6月25日）」として、表1に記載の「大磯町照ヶ崎海岸におけるアオバトの生態」、「アオバトの糞から検出された種子植物」、「丹沢山地堂平におけるアオバトの繁殖調査」の概要をもとに展示を構成しました。

アオバトは生態があまり知られていない野鳥です。1991年に実施した照ヶ崎海岸におけるアオバト飛来数調査により、海水吸飲を目的に非常にたくさんのアオバトが集団飛来していることが分かっているのですが、海水吸飲の習性については、はっきりしたことが分かっていないのが実状です。1991年以後の調査として、『こまたん』は照ヶ崎の岩に付着しているアオバトの糞を採取し、糞に混じている種子をもとに何を食べているか調査しました。また、繁殖地として考えられる丹沢山地堂平において繁殖生態調査を実施し、繁殖時期と照ヶ崎への飛来時期の関連性について考察しています。これらの結果をもとにアオバトが海水を飲む理由として、表2のような仮説を立てています。

### アオバトが海水を飲む理由

#### <仮説1> 食べ物による理由

海水を飲む時期の食べ物は果実（液果）に限られている。果肉にはナトリウムがほとんど含まれず、カリウムが多いので、カリウム／ナトリウムバランスが崩れ、生命活動に異常をきたす。これを解消するために海水（塩分）からナトリウムを補給するのではないかな？

#### <仮説2> 子育て方法による理由

海水を飲む時期は繁殖（子育て）の時期と重なる。

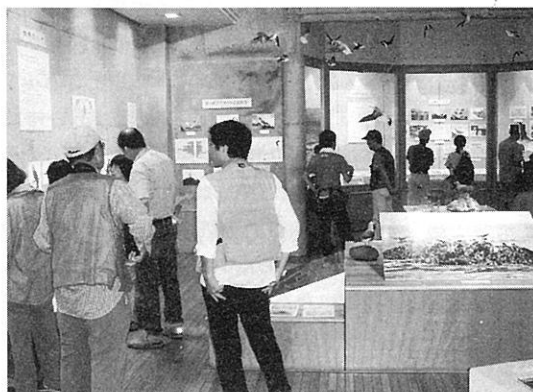
アオバト（ハト類）は雄親、雌親ともにピジョンミルクと呼ばれるものを吐き出してヒナに与える。このため、親鳥は水分とナトリウム（ミルクの成分）が多量に不足する。このとき、水分を体内に確保するために体液中のナトリウム濃度を引き上げることと、ピジョンミルク吐き出しによるナトリウム不足を解消するために、海水（塩分）からナトリウムを補給するのではないかな？

#### <補足>

同じハトの仲間であるが別のグループに分類されるカワラバトの仲間にも塩分補給の行動例があるが、彼らも塩分補給を行なう時期には果実食にかたよっているようである。また、キジバトやドバトもピジョンミルクで子育てを行なうが、彼らは果実食にかたよらず、塩分は食べ物から補給していると思われる。

表 2

展示では照ヶ崎における飛来の様子とともに、それぞれの調査の様子を写真パネルで紹介しました。また、アオバトの学名 *Treron sieboldii*（トレロン・シーボルディー；翻訳するとシーボルトのハト）を起点に、シーボルトとアオバトとの関わりを調べ、命名の根拠となるアオバトのタイプ標本、シーボルトの日本での生活について触れました。



後期展示の展示風景

後期展示ではサブタイトルを「どんなくらしをしているのか？（会期7月4日～7月30日）」と題して、表1の「大磯町照ヶ崎海岸におけるアオバトの幼鳥観察」、「京都御苑のアオバトー2004年秋～2005年春ー」をもとに構成しました。内容としては、アオバトの発育段階に見られる形態の違い、照ヶ崎における幼鳥出現率の推移とともに近年、京都御苑において確認されたアオバトの生態観察の様子を紹介しました。また、アオバトは地方によって様々な呼び方があり、その呼び名を列記するとともに古文書に記載されているアオバトの姿、呼び名なども紹介しました。

前期・後期通しの展示スペースではハト類の分類、アオバトの世界分布などパネルを中心に分類学上の位置づけを紹介し、巻島克之氏（東京都在住）作の油彩画でジャパンバードフェスティバル2002「日本ワイルドライフアート作品展（ジャパンバードフェスティバル実行委員会主催）」で「山階鳥類研究所 所長賞」を受賞された作品『大磯照ヶ崎のアオバト』のほかアオバトと照ヶ崎が描かれた作品を展示しました。

また、展示パネルだけでは、伝わりにくいアオバトの生態について、補足的に説明するためテレビで放映されたアオバト関連の番組を繰り返し再生しました。鳴き声についても、町内で確認されている3種のハト類（アオバト、キジバト、ドバト）の違いを理解していただくよう室内に鳴き声を流しました。

## 関連行事の実施

本展会期中に展示内容について更に理解を深めていただくため、関連行事として、アオバト観察会を3回、ミュージアムトーク「アオバトのふしぎ」を1回実施しました。照ヶ崎現地でアオバト観察会は5～7月の第4日曜日、飛来数が多く、一般の方でも観察しやすい時間帯 午前7時から9時にかけて行ないました。双眼鏡やフィールドスコープによるアオバトの飛来・海水吸飲の様子の観察とともに『こまたん』の方々にアオバトや照ヶ崎で見られる他の野鳥の生態について解説していただきました。5月の観察会ではあいにくの降雨のため、アオバトの飛来はあまり見られませんが、6月と7月の観察会では、大きな群れで飛来する様子が観察できました。観察会参加者も5月は19人と少数でしたが、6月、7月は74人、150人とたいへん多くの方々にご参加いただきました。

ミュージアムトーク「アオバトのふしぎ」では、前期展示の最終日の6月25日に当館 研修室において『アオバト探検隊（こまたん有志）』の方々に講師にこれまでの調査活動の様子をご講話いただきました。本講座においても72人と多数の方にご参加いただきました。



7月のアオバト観察会の様子（7月30日撮影）

## まとめにかえて

本展は『こまたん』と共同で企画を進めました。当館の自然分野で他の団体と共同で展示開催するのは初めてのことです。細部にわたり内容を詰めていけるように本年2月から月2回のペースで展示の打ち合わせを行ないました。展示の構想や関連行事の立案、リーフレットの作製、列品作業など一連の展示作業を共同で進める中で、『こまたん』の方々の調査活動・環境保全活動に対する熱意を強く感じました。『こまたん』には会則がなく、代表者も決まっていません。企画を

提案した人が取りまとめるリーダーシップで運営しています。それぞれの調査や観察会を含めた環境保全に関しての地道な活動は、参画される一人一人が強い意志を持っていないと継続して行なうことは難しく、成果を出すことも難しいのではないかと思います。しかしながら、『こまたん』の方にこれまでの調査活動についての感想を伺うと「みんなでゆっくりと楽しみながらやっているの、苦労と感じたことはない」とのことでした。何事も継続して一つのことを行なうには、まずは楽しさを感じることが大切だということを再認識しました。

『こまたん』のこれまでの調査活動に対して敬意を表しますとともに今後のご活躍を祈念いたします。

以下、入館者の方よりいただいた本展に対する意見・感想をまとめました。本展は総入場者数4,682人（前期展示：2,637人、後期展示：2,045人）でこの内83人の方からご意見をいただきました。メッセージ回収率は総入場者数に対して1.8%であり、来館された方が同様に感じられたか否か判断することは難しいのですが、いただいた1つ1つの意見が、今後、企画を組むうえで、参考となるものであります。意見・感想を大別して紹介します。

## <好意的な意見>

### 1. 本企画に賛同（23件）

「益々、アオバトが好きになりました。このようなアオバトに関する企画展を継続して実施していただきたいと思います。」など他22件。

### 2. こまたんの長年の調査に対して賞賛・賛同（20件）

「こまたんの熱心な研究で、ここまでアオバトの生態がわかり素晴らしいと思いました。」「長年の調査の積み重ねが良く分かる展示でした。」など他18件。

### 3. アオバトの生息環境の保全について（11件）

「アオバトが海水を飲みに来るこの大磯の自然がいつまでも続いてほしいと願っております。」「今後もアオバトの環境維持を大切に共存して未来に託していただけるようお願いします。」「アオバトが丹沢からわざわざ飛来するのだから、丹沢も照ヶ崎も失ってはならない自然だと思った。」など他8件。

### 4. 展示レイアウト、構成について（10件）

「アオバトのことやハトのもけいに説明がかいてあって分かりやすかった。」など他9件。

### 5. アオバトの映像導入について、または映像を通して学べたことなど（9件）

「アオバトのビデオを見てアオバトの生態がよくわかりました。」など他8件。

6.『なぜ海水を飲むのか?』の展示コーナーについて (9件)

「この展示を見て塩水を飲む不思議を実感しました。」「何故海水を飲むのかがよくわかりました。」「アオバトは海水を飲むけどしょっぱくないのかな?」など他6件。

7. アオバトの姿・羽色に感激 (8件)

「アオバトはとてもきれいな色のハトで感動しました。」「みどり色がきれいだなと思いました。」など他6件。

8.『世界のハト』の展示コーナーについて (8件)

「『世界のハト』が参考になった。」「アオバトやカラバトのしゅるいがいっぱいいてすごかった。」など他6件。

9.「照ヶ崎のアオバト (巻島克之氏作)」の絵画について (7件)

「アオバトの絵が素敵でした。」など他6件。

10. アオバトの声の再生について (6件)

「大井町のいこいの村や我家の裏山で聴こえたふしぎな音がアオバトの鳴声だったとわかり、長年のナゾがとけてスッキリしました。」「アオバトのなきごえがながれているのがよかった。」など他4件。

11. バードモビールについて (6件)

「町田のかしの木山のグループで来ました。天井から下がっているアオバト、いいですね。天井から下がっているアオバト、展示が終わったらほしいと会の者がいっていました。」など他5件。

12. 現地でのアオバトの姿に感動 (5件)

「早朝からがんばって来たかいがあり、あおばとの

美しい姿と波に向かうけんめいな姿を見ることができました。」「アオバトについて以前から興味を持っていました。照ヶ崎で見かけ、その姿の美しさに感動しました。」など他3件。

13. リーフレットについて (2件)

「パンフレットの見られる時期・時刻などの表は、実際観察したデータがもとになっていて、おもしろいと思います。」他1件。

14. アオバトの全羽毛調査について (2件)

「大きな羽や小さな羽があつてすごかった。」「羽について 大変興味深いものでした。」

15. アオバトの生態写真について (2件)

「ハヤブサのえじきになっているアオバトの写真がすごかった。」他1件。

16. その他の意見

「大磯港に特長のあるあおばとの研究成果を是非、大磯小、中、高の子供の教材に生かしていただきたい。」「学名がシーボルトのハトというのは初めて知りました。」「アオバトの呼び名が都道府県によって違い多くの呼び方がある事を知りました。」「アオバトをシンボルとしている市町村 メモしました。」「冬季のアオバトの生活が良く判りました。」

<批判的な意見>

「246号線から郷土資料館に至る道順がわかりにくい。」「展示室内での話し声がものすごくビデオの音声もほとんど聞こえず残念でした。もう少し他の閲覧者にも配慮して下さい。」「もう少し展示スペースが広ければいいのに。」「思っていたより狭いスペースでした。」「アオバトの声がずっと流れているのはきつかった。」

資料紹介

本展を契機に、絵画資料を出展していただきました巻島克之氏よりジャパンバードフェスティバル2002で「山階鳥類研究所 所長賞」を受賞された作品『大磯照ヶ崎のアオバト』をご寄贈いただきました。企画展終了後、8月11日より大磯町本庁舎1階ロビーにおいて展示しています。今後も幅広く活用したいと考えています。

ご寄贈いただきました巻島克之さんには、厚く御礼申し上げます。

(当館学芸員 北水慶一)



大磯町本庁舎ロビーでの展示

## 2006年のストランディング情報

### ウミガメ情報

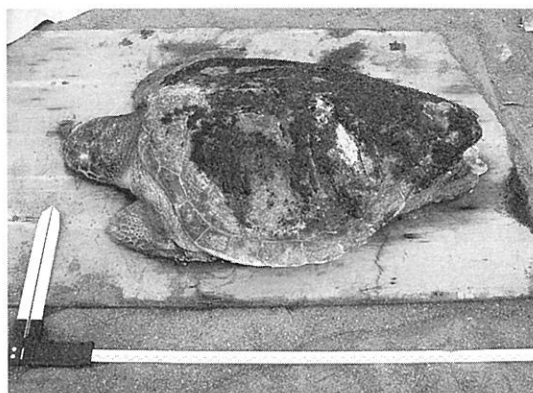
本年は産卵については、確認情報はありませんでしたが、ストランディング（漂着）については4個体の情報をいただきました。4個体の内訳はアカウミガメが2個体、アオウミガメが1個体、オサガメが1個体でした。当館で記録を取るようになった1988年から2001年まではすべてがアカウミガメでしたが、2002年以降は、アオウミガメ、タイマイ、オサガメも確認されるようになってきています。アオウミガメは2004年から確認されるようになり、以降毎年、確認されています。オサガメは相模湾で確認されることは極めて珍しい種類で、当町海岸においては4年ぶり2個体目の確認となります。

#### <確認状況>

- ①アオウミガメ（直甲長 約35cm）／5月9日、石井雅之氏が大磯町西小磯の海岸で確認。白骨化が進み、甲長等の正確な数値は計測できなかった。
- ②オサガメ（標準直甲長132.7cm 直甲幅72.4cm）／5月26日、大磯町国府新宿の海岸で確認。
- ③アカウミガメ（標準直甲長81.2cm 直甲幅63.9cm）5月30日／大磯町西小磯の海岸で確認。
- ④アカウミガメ（標準直甲長75.9cm 直甲幅62.2cm）7月12日／大磯町大磯の北浜海岸で確認。

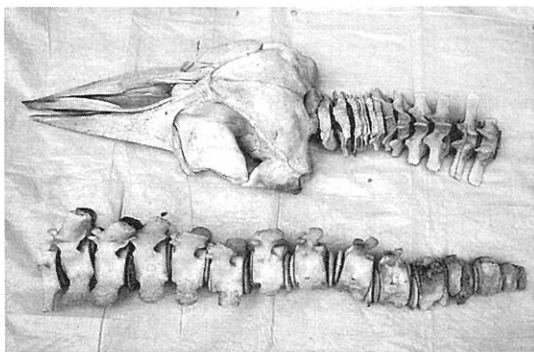


オサガメ（5月26日漂着）



アカウミガメ（7月12日漂着）

### ミンククジラの骨を回収



回収したミンククジラの骨の一部

本年2月23日、大磯町大磯地先に設置してある定置網にミンククジラが掛かりました。体長は約3.9メートル、衰弱した状態でした。水揚げした同日に販売のため解体し、残った頭骨、脊椎骨、前肢、右上の歯部を学術研究目的として当館にいただきました。歯部は冷凍庫内に保管し、骨は肉片が付着した状態であった

ので、肉片を分解・除去するため当館敷地内に埋めました。資料館に持ち込まれた時、既に脊椎は3分割されており、すべての骨が縦 約120cm、横 約80cm、深さ 約80cmの穴に収まりました。

9月29日、博物館実習の実習生6人とともに掘り起こし、骨の回収を試みました。最下部においてあったものを除いては、すべて肉片が分解されており、一部分を除いてほとんど回収することができました。回収した骨は非常に状態がよく、また、生前時と同じように骨を並べると非常に迫力のある状態になります。クリーニング、漂白などの処理をして、将来的には骨格標本として展示できればと考えています。

※ 混獲されたひげ鯨類を販売したり、体の部位を学術研究目的で所持したりする場合は、農林水産大臣宛の報告、届出が義務付けられています。当館におけるミンククジラの骨等の所持については、所定の手続きを完遂しています。

（当館学芸員 北水慶一）

## 文化財特別公開

### 『旧高麗寺の神と仏

#### ー神仏混淆(しんぶつこんこう)を体感するー』

#### はじめに

大磯町郷土資料館では、平成18年10月15日(日)から平成19年3月31日(土)まで、『旧高麗寺の神と仏ー神仏混淆(しんぶつこんこう)を体感するー』と題した展示を開催しています。これまでも、文化財特別公開『初公開／高来神社蔵木造神像群 修復完工／慶覚院蔵木造仁王像』(平成14年)、東海道シンポジウム大磯宿大会記念展『旧高麗寺の寺宝』(同14年)として、旧高麗寺にかかわる文化財の公開を実施してきました。今回はシリーズ3回目の企画となります。

#### 高麗寺とは

大磯町の東側にそびえる高麗山(高麗寺山)の南麓には、高来神社が鎮座しています。江戸時代、歌川広重の描いた東海道五十三次のうち、「平塚宿」の重要なモチーフとなったその特異な山容は、陸上・海上ともに遠方から仰ぐことのできるランドマークとして、古くから信仰の対象となってきました。同社の創建はたいへん古く、6世紀以前とされており、神皇産霊尊、神功皇后、応神天皇を祭神としています。また、高句麗からの渡来伝承をもち、江戸時代までは神仏混淆の形態により高麗権現社と称していました。さらに高麗山中央峰の高麗権現社、東西の峰の白山社と毘沙門塔をあわせて、高麗三社権現とも呼ばれており、千手観音を本地仏とした鶏足山雲上院高麗寺を別当寺としていました。『続日本紀』、『箱根山縁起』、『走湯山縁起』、『北条記』、『吾妻鏡』などの文献にもその名を見ることができます。

中世では、相模国における大社寺の一つに数えられ、建久3年(1192)には北条政子の安産祈願がなされるなど、将軍家の厚い信仰を受けました。また、小田原北条氏からも保護を受け、67貫余の地を与えられています。

近世に入ると、徳川家康によって、天正19年(1591)に100石の朱印地を与えられ、境内は霊域として丁重に保護されました。天保12年(1841)に成立した『新編相模国風土記稿』の高麗寺村の項に掲載されている「高麗寺境内図」には、権現社のほか、白山社、毘沙門塔(跡)、観音堂、仁王門、地蔵堂などの諸堂が描かれており、当時の様相を知ることができます。なお、最近の調査で、寛延3年(1750)頃に大磯宿から高麗

寺村が分離独立したことが分かってきました。高麗寺村は上野寛永寺の末寺である高麗寺の寺領の村として成立しており、一方で宗教的権威のあった高麗寺は、同時に村を支配する領主という性格を持っていたことが分かります。

やがて、明治政府による神仏分離の政策は、高麗寺の信仰形態を大きく変えることになります。これによって高麗寺は廃絶しましたが、高麗寺の遺物は、高麗神社(明治30年に高来神社と改名)と村持となった地蔵堂に引き継がれました。

#### 神仏混淆とは

古代から近世に至るまで、神と仏は渾然一体でした。その起源は古く、奈良時代には仏教と神道の一体化をはかった、いわゆる神仏習合の宗教思想が生まれています。さらに平安時代には、仏が仮に神の姿で現れ、衆生を済度するという本地垂迹説(ほんじすいじゃくせつ)が唱えられるようになり、広く一般化しました。明治元年(1868)の明治政府による神仏分離令で制度的終焉を迎えるまで、神仏混淆の時代が長く続くことになります。神仏分離政策は、神道の国教化を目的として、社寺から神と仏の厳しい分別を推し進めました。今日、私たちが目にする神や仏、あるいは社寺の様子は、いわば明治時代以降に整えられた姿といえます。したがって、それ以前の様子は今日私たちの目にしている光景と大きく異なっていたことが想像されます。

神仏分離政策による廃仏毀釈を受けて、高麗寺は廃寺となります。高麗権現社は高麗明神社と改称され、高麗寺の住職らはすべて還俗して神職となりました。村名も高麗寺村から高麗村に変わり、高麗明神社領の上知や払い下げをめぐる争いが起きるなど、神仏分離政策は社寺と村方との関係にも大きな影響を与えました。

#### 高麗寺の宗教空間を再現

高麗寺の廃寺にあたり、寺にあった神像類は高麗神社へ、仏像類は地蔵堂に移されました。その後、大磯宿(南下町)にあった高麗寺末寺の慶覚院が、明治23年(1890)の大火によって類焼したため、地蔵堂へ移転することになります。

さて、現在の慶覚院には、高麗寺の遺物でもある千手観音立像(町指定・平安時代)と、地蔵菩薩坐像(県重文・鎌倉時代)が残されています。

千手観音は大磯浦の海中より出現したと伝える高麗権現の本地仏であり、高麗寺観音堂に安置されていた

ようです。現在は慶覚院の本尊であり、秘仏として子年のみに開扉されています。平安時代の作として昭和47年（1972）に町指定有形文化財に指定されました。

地藏菩薩は『新編相模国風土記稿』でいうところの、遊女虎の持念仏と伝える延命地藏を指すと思われ、地藏堂に安置されていました。その後の調査で、仏師名は詳らかではありませんが、面部内に建治4年（1278）の墨書が確認され、昭和49年（1974）に神奈川県指定重要文化財として指定されています。

慶覚院本堂脇に保管されていた仁王像も旧高麗寺の遺物です。仁王像は、高来神社に残されていた棟札から寛永11年（1634）に神門（仁王門）とともに再興されたことが確認されました。そして、平成11年（1999）、大磯町指定有形文化財として指定され、同13年（2001）に保存修理が行なわれています。

また、平成12年（2000）には高来神社神輿堂から11軀におよぶ神像群が発見されました。一部の古い書物には、高麗権現社に祀られていた神像の所在が記されていましたが、実際に目にした人はほとんどいなかったと思われます。したがって、おそらく初めて公の場に姿を現したことになります。そして、11軀のうちの2軀からは弘安5年（1282）の年記と墨書銘が発見さ

れ、ほぼすべてが鎌倉時代の作であると考えられています。平成16年（2004）、町指定有形文化財となりました。

さらに、平成18年（2006）には、慶覚院に残されていた白山大権現立像（室町時代後期）、および毘沙門天立像（平安時代後期）を再確認することができました。これらは高麗山東峰の白山社、西峯の毘沙門塔にそれぞれ祀られていたと伝えるものです。

これらによって、少なくとも『新編相模国風土記稿』の「高麗寺境内図」に記されている権現社、白山社、毘沙門塔、観音堂、仁王門、地藏堂に祀られていた神仏のすべてが今日に残されていたことになります。長い歴史の中で度重なる兵火に遭い、災害に倒れ、老朽により改められた諸堂の経緯を考えれば、そこに祀られていた神仏が、今日まで生き延びてきたことは、たいへんな驚きです。それも、護り伝えてこられた多くの方々の存在なくては語ることはできないでしょう。

このたび、高麗寺の宗教空間を再現することのできる神仏が郷土資料館に揃いました。近世以前の神仏混淆の宗教空間をぜひご体感ください。

（当館学芸員 佐川和裕）

#### <主な展示資料一覧>

\* 期間中、一部展示替えを行ないます。

|                   |         |
|-------------------|---------|
| 県重要文化財／木造地藏菩薩坐像   | （鎌倉時代）  |
| 町指定文化財／木造男神立像     | （鎌倉時代）  |
| 町指定文化財／木造女神立像     | （鎌倉時代）  |
| 町指定文化財／木造僧形立像     | （鎌倉時代）  |
| 町指定文化財／木造仁王像      | （江戸時代）  |
| 木造毘沙門天立像          | （平安時代）  |
| 木造白山大権現立像         | （室町時代）  |
| 木造伝掌善童子立像         | （江戸時代）  |
| 木造伝掌悪童子立像         | （江戸時代）  |
| 木造天海僧正坐像          | （江戸時代）  |
| 木造虎御前坐像           | （江戸時代）  |
| 千手観世音堂棟札          | （享和元年）  |
| 仁王尊像棟札            | （寛永11年） |
| 天海僧正より高麗寺雲上院宛書    | （寛永20年） |
| 高麗権現再建につき本寺寛永寺へ届書 | （安政5年）  |
| 高麗明神領明細書上         | （明治3年）  |



木造毘沙門天立像（平安時代後期・慶覚院蔵）

## 『城山荘（三井大磯別邸）軸組模型 と久米権久郎』

大磯町郷土資料館のエントランスホールに在る木骨の構造模型は、当資料館が掲げているテーマ「湘南の丘陵と海」を象徴し、ご来館の皆様にも、まずは館全体へのアプローチをする資料という意味を込めて展示しています。

この模型は、三井総本家第十代当主・三井八郎右衛門高棟が営んだ別荘で、本館をはじめ、国宝に指定された茶室「如庵」など、30の建物から成る「城山荘」本館（以下、本館とします）の構造模型です。実際の建物とはデザインが若干異なっていますが、本館はこの模型を基礎として建築の検討がなされたと考えられています。当館が建つ「県立大磯城山公園」は、元は「城山荘」があった場所であり、また、当館の建物は、本館のモチーフを部分的に活かして建てられています。

大磯という町の特徴は、鷹取山などの山々を背に、広々とした相模湾を望む、丘陵と海が共存している環境にあると言えるでしょう。

さらに、途絶えることなく刻まれてきた歴史というものも、大磯を語るには外すことの出来ない重要なポイントです。大磯町内からは数々の縄文時代の遺跡が発見されており、かなり早い時期から人間の生活が始まった場所であることが明らかになっています。また、平安時代には国府が置かれていた可能性を持ち、江戸時代に入ると、宿場町として本陣を構え、浮世絵にも描かれた賑わいを見せました。そして明治時代を迎え、松本順による海水浴場の開設や鉄道が敷かれたこと等が相まって、政財界に名を轟かせた人物達がこぞってこの地に別荘を構え、大磯は日本初のリゾート地として全国に知られるようになったという背景があります。

このような特色のある大磯に建てられた「城山荘」ですが、本館の中央に聳えた養老閣からは、大磯ならではの山海の景色が一望に楽しめたと言われています。

「城山荘」は、昭和8年から10年までの、およそ3年の歳月をかけて完成しましたが、元々、明治22年頃に別荘として既に購入されていたため、かつて別荘の建築により町全体が極めた隆盛の証の一つ、史実としての意味を持ち合わせていた邸でもあったのです。

このように、当館のテーマ「湘南の丘陵と海」、そして大磯町の特徴ある景観と歴史を端的に語る資料として、『城山荘（三井大磯別邸）軸組模型』は、当館エントランスホールに在るのです。

この模型を作成したのは、久米権久郎という、城山

荘の本館を設計した人物です。

久米権久郎（明治28年～昭和40年）は、皇居・二重橋を手がけた建築家、久米民之助の次男で、大正12年（1923）にドイツに留学し、木造建築の耐震構法に関する研究を積んで帰国。その技術を高く評価したのが三井高棟でした。「城山荘」は、関東大震災で壊滅的な被害を受けた過去があり、高棟はその経験をふまえて、本館の建築を、当時の耐震構造の権威であった久米に託したといわれています。

その特徴は、細い角の柱を四本又は二本組み合わせ間柱を多く取り入れた大壁式の工法で、柱を全てボルトで締め、力を平均して分散させると共に施工性をよくする、画期的な工法であったということです。

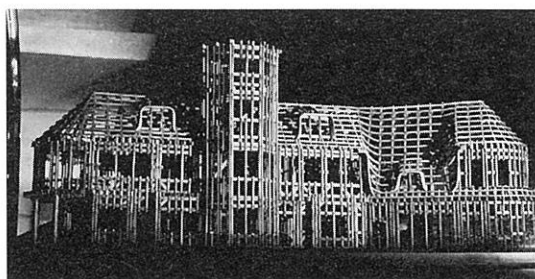
当館所蔵の『軸組模型』を見ると、確かに細い柱が四本又は二本に組まれ、ボルトの代わりに釘を用い、一つ一つ丁寧に打ち込まれており、限りなく実体に近づけて作成されていることが理解できます。また、土地の起伏に沿うように、高低を利用しながら綿密な構想が練られた跡をも窺えます。

この模型は、邸をどのように建てるかという具体的な且つ現実的な問題を扱い、高棟の「耐震」への配慮が強く表れている模型であると捉えることができるのではないのでしょうか。

本館の建築上の特色として、有名社寺の古材を各所に用い、「古材館」との別称があることは広く知られていますが、この模型から、高棟のこだわりや「久米式耐震構造」の詳細が把握でき、また、久米が建築家として手がけた初期の頃の作品を知る手がかりとして、大変貴重な資料であると言えるでしょう。

久米権久郎は、盲導犬への理解を広めようと、生涯をかけて奔走していました。また、『日本美の再発見』などを著し、日本人に日本の美を再認識させたドイツの建築家、ブルーノ・タウトのよき理解者であり、援助者であり、そして協力者であったことも、ここに併せて記しておきたいと思います。

（臨時学芸職員 近藤直子）



城山荘（三井大磯別邸）軸組模型（当館蔵）

## 【『浮世絵に見る大磯』展 開催中】

—常設展示室・小コーナーにて—

毎年恒例になっております、当資料館で博物館実習を行い、学芸員資格取得を目指す大学生の手により、常設展示室内小コーナーの展示替えを行いました。

『浮世絵に見る大磯』と題し、東海道と松並木に焦点を当て、浮世絵に描かれた江戸時代の大磯と現在の風景を比較し、町並みの変化をご紹介します。また併せて、大磯に遺された、歴史的な景観を保存する一助となることへの願いが込められています。

近い将来、学芸員として活躍が期待される実習生の、渾身の展示をご鑑賞ください。

## 【資料の受入】

ご協力ありがとうございました。

(寄贈)

|      |        |          |   |
|------|--------|----------|---|
| 大磯   | 安部川征彦氏 | マイワイ(生地) | 他 |
| 大磯   | 安部川マリ氏 | カンザシ     | 他 |
| 大磯   | 飯田福信氏  | ボディボード   | 他 |
| 大磯   | 伊藤友治氏  | 念仏講道具一括  |   |
| 大磯   | 木村純子氏  | 貝標本      | 他 |
| 東小磯  | 新見紀雄氏  | 矢筒(箆)    | 他 |
| 西小磯  | 波多野正之氏 | 蚊帳       | 他 |
| 西小磯  | 石井祥子氏  | 洗濯機      | 他 |
| 国府本郷 | 矢部良子氏  | 婚礼の着物一式  | 他 |
| 国府本郷 | 加藤廣美氏  | チマキ      |   |
| 国府新宿 | 近藤昭二氏  | 仕込杖      | 他 |
| 国府新宿 | 小島孝蔵氏  | 布        | 他 |
| 生 沢  | 鈴木一男氏  | 携帯電話     |   |
| 二宮町  | 西山敏夫氏  | ログイ      | 他 |
| 平塚市  | 安藤次郎氏  | 馬の歯      | 他 |
| 平塚市  | 森 保治氏  | 蕎麦打ち機    | 他 |
| 江東区  | 巻島克之氏  | 油彩画      |   |

## 【編集後記】

アオバトが神奈川県天然記念物指定となり、10年経ちました。これを記念し、ご好評をいただきました『アオバトのふしぎ』を振り返ることで、本号をアオバト特集号としてお届けします。その神秘的な生態に、一層のご関心をお持ちいただけましたら幸いです。また、開催中の文化財特別公開では、神奈川県や大磯町から文化財に指定された至宝を展示し、旧高麗寺の宗教空間を再現しています。修復を控え、現状の姿では最後の公開となる作品も含まれています。この機会に、ご高覧を賜りますようお願い申し上げます。(N.K)



平成18年度博物館実習生

## 【行事のご案内】

大磯町郷土資料館では、みなさんのご参加をお待ちしています。詳しくは広報若しくは資料館へ直接お問い合わせください。

ウェブサイトでもお知らせしています。

大磯町役場のホームページにアクセスし、「郷土資料館」の公式ページをクリックしていただきますと、当館の特別展や講座のご案内があります。ぜひご覧ください。  
<http://www.town.oiso.kanagawa.jp/>

## ギャラリー・トーク

開催中の文化財特別公開『旧高麗寺の神と仏—神仏混淆を体感する—』をより深くご鑑賞いただけるよう、当館学芸員によるギャラリー・トークを開催いたします。

平成18年11月12日、12月10日

平成19年2月11日、3月11日

全4回。お申し込みは不要です。

場所：大磯町郷土資料館 企画展示室

時間：いずれも午後1時00分～3時00分。

(随時開催)

## 【表紙解説】

照ヶ崎海岸で海水を飲むアオバトの群れ

(写真提供：こまたん)

## Report - 大磯町郷土資料館だより - No.27

平成18年11月30日

編集発行 大磯町郷土資料館

〒255-0005 神奈川県大磯町西小磯446-1

TEL. 0463 (61) 4700

FAX. 0463 (61) 4660